

遺伝子検査にて種同定を試みた *Taenia* 属条虫の 1 例

◎伊藤 彰洋¹⁾、仲本 賢太郎²⁾、蒲澤 康晃¹⁾、酒巻 尚子¹⁾、藤上 卓馬¹⁾、寺坂 明香¹⁾、永田 篤志¹⁾、田中 浩一¹⁾
JA 愛知厚生連 豊田厚生病院¹⁾、藤田医科大学²⁾

【はじめに】日本における寄生虫の報告件数は減少しており、当院においても経験不足から形態学的に鑑別に苦慮する症例が多い。今回専門家の力添えで遺伝子学的に種同定を試みた 1 例を経験したので報告する。

【症例】40 代ブラジル人女性。便中に運動性のある数 cm 程度の白い虫体が確認された。

【背景】来日 2 年目で日本以外への渡航歴なし。2 年以上前から下着に同様の虫体を認めており、ブラジルにて駆虫歴がある。

【経過】虫体鑑別依頼として提出された便中に、長さ約 2cm の伸縮運動を伴う、きしめん様の虫体が検出された。院内では同定に苦慮したため愛知県臨床検査技師会一般検査研究班に意見を求めたところ、*Taenia* 属条虫の片節を疑うとの意見があった。次回検体提出時には、生殖孔・子宮分枝・虫卵の形態を確認することを提言された。また国外での感染の可能性を否定できないため遺伝子検査による同定を行うことを推奨された。

【結果】再提出された虫体を観察すると側面に隆起を認め、

その中央部に子宮孔と思われる小さな孔がみられたため、墨汁を注入したところ子宮分枝を認めた。また虫体を細断し一部を遺伝子検査用に凍結保存し残りを浮遊液として虫卵検索を行った。鏡検により褐色で放射状の幼虫被殻をもつ *Taenia* 属条虫卵を複数認め、一部無色透明の卵殻や六鉤幼虫も確認された。以上より虫体鑑別結果を“*Taenia* 属条虫疑い”として依頼医へ報告した。翌外来受診日にプラジカンテルが処方され約 3m の虫体が排泄されたが、頭節は確認されなかったため再発の可能性があることを加えて報告した。並行して扁形動物特異的なプライマー jb3 及び jb4.5 を用いて種同定のためのシーケンス解析を試みた。本稿作成時は同定未完了であるが発表時に詳細を報告する。

【考察】*Taenia* 属条虫は形態学的な種鑑別は困難であるが、特に神経囊虫症の原因となる有鉤条虫は早期発見が求められるため形態学的特徴を把握し属推定だけでもできるような院内の力量を高めていく必要がある。遺伝子検査についての考察は発表時に報告する。

連絡先(0565)-43-5000